（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	中田 智也
論文題目	英語定名詞句の指示について——哲学的指示理論は何を与えうるか——		

（論文内容の要旨）

本論文は、英語の定名詞句の中でも定冠詞theの付いた単数名詞を対象として、その指示の様態を単称命題をキーワードとして考察することによって、哲学的指示理論と言語学とを架橋しようと試みたものである。

序章「指示について」では、本論において必要となる「指示」や「対象」を定義し、哲学的指示理論で「確定記述」と呼ばれる定冠詞theの付いた単数名詞に考察を限定することが述べられ、併せて言語哲学の成果を言語学に応用することを本論の目的として提示している。

第1章では、Kaplan (1978) に基づいて単称命題と一般命題を定式化し、Russellが論理的固有名の探索へと向かった動機を記述理論の考察を通して探った後に、KaplanとRussellの単称命題に関する見解の相違を確認している。その相違はRussellが単称命題を構成する単称名辞の基盤を「見知り」に求めたのに対して、Kaplanでは「意味特性」(character) に基づいていることによるとされる。またDonnellanが提唱した定名詞句の指示的用法と属性的用法の区別が、Kaplanによる命題の区別とどのような関係にあるかを考察し、指示的用法で用いられた定名詞句と述語から成る文は単称命題を構成し、属性的用法で用いられた定名詞句と述語から成る文は一般命題を構成すると結論している。

第2章では単称命題と指示の歴史的説明を論じている。Russellは固有名の使用には「記述の裏付け」(backing of descriptions) が必要だとし、それは彼の記述理論の基盤をなしている。これに対してDonnellan、Kripkeらは歴史的説明理論を提唱して、固有名の使用を担保するのは記述ではなく「間接的見知り」であるとした。本章では固有名の使用に関するこの議論を指示的定名詞句に拡張することによって、指示的定名詞句と述語からなる文は単称命題を構成するとしている。

第3章ではAlmog (2014) の指示理論を中心に考察を行っている。同書はDonnellanの定名詞句の指示的用法をめぐる理論の詳細な解説であり、指示的定名詞句を使用する際のプロセスが3段階にわたって示されている。第1段階では話し手が対象を知覚し、第2段階では話し手が対象に対して言語による特徴づけを行い、第3段階では話し手が実際に指示的定名詞句を使用し、聞き手が指示対象を同定する。名詞句に関するAlmogの理論に、本章では、話し手による述語の使用と聞き手による文全体の理解を表す第4段階を付け加えることによって文の意味解釈へと拡張している。併せて、述語を用いた言語による特徴づけは第2段階で行われるとの見解を示している。

第4章では指示的定名詞句に現れる制限的関係節の問題を、意味論的および語用論的に考察している。指示的定名詞句のなかには制限的関係節を含むものがある。そのような関係節を本論ではR関係節と呼び、R関係節が指示的定名詞句の指示機能にどのような役割を担っているかが本章の主題である。制限的関係節の統語構造をめぐっては、関係節の先行詞の範疇に関して従来から2つの見解が対立してきた。先行詞をNPとする見解とN’とする見解である。本章では英語の関係節に関する包括的研究である河野 (2012) を批判的に検討し、R関係節が発話される条件として「話し手がNPの要素を発話するだけでは聞き手は指示対象を同定することができない」という条件を立てて、その条件と整合的なのは先行詞をNPとする立場だと結論づけている。またこの結論に基づいて、R関係節はそれを含

む指示的定名詞句が持つ指示機能の不可欠な一部を担うことを論じている。

第5章では指示的定名詞句からの外置に関する制約に意味論的・語用論的考察を行っている。従来から英語の主語名詞句からの外置には、「定性制約」と呼ばれる制約があることが知られている。主語が不定名詞句のときは主語の中の前置詞句・関係節を文末に移動して外置することができるが、主語が定名詞句のときにはそれができないという制約である。本章ではZif & Cole (1974)、Guéron (1980)、Huck & Na (1990)、高見 (1995)、河野 (2012) などの先行研究を批判的に検討し、これらの研究が一律に外置を可または不可とする条件の存在を前提としていることを指摘する。これに対してStucky (1987) は、外置の可否は文法（統語論）の問題ではなく、話し手による文の統語解析の結果がもたらすものであり、外置の適格性の判定が話し手により大きく異なるとしている。本章ではStuckyの分析を支持し、従来「定性制約」と呼ばれてきたものは、定名詞句主語からの外置を回避する傾向にすぎないとする。その上で、Almog (2014) による指示的用法の定名詞句の意味解釈の理論を援用し、外置が回避されるのは文の理解に対する聞き手の負荷を増大させないためだと結論づけている。

第6章では定名詞句の指示の不透明性を考察している。本章では、命題的態度を表す動詞の補文中で定名詞句の指示の不透明性を引き起こす原因はその属性的解釈であるというCole (1978) の主張を批判し、指示の不透明性の原因は参与者の知識状態と定名詞句の指示的／属性的解釈という複合的要因であるとしている。この見解に基づいて細かい場合分けを行って、どのような要因が組み合わされたときに指示の不透明性が生じるかを明らかにしている。

終章は本論全体のまとめと今後の展望である。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は言語哲学の成果を言語学に応用することを目的として、英語の定名詞句のうち定冠詞theを伴う単数形の名詞句を取り上げ、その定名詞句が指す指示対象の指示がどのような機序によって成立するかを、言語哲学における単称命題をめぐる考察を踏まえて明らかにしようとしたものである。

固有名や名詞句の指示の問題は、言語学においても大きなテーマとして取り上げられるが、Fregeに端を発しRussellらが展開した言語哲学の分野においてとりわけ大きな問題として論じられてきた。文は「何か」について何事かを述べるものだが、その「何か」がどのように指示され、話し手と聞き手に了解されるかは、文が表す意味の構成と意味の伝達にとって中心的な課題だからである。

本論文の第1章から第3章までは、言語哲学における指示の問題の批判的検討に当てられている。Russellの固有名に関する記述理論と、KaplanやDonnellanら直接指示理論に基づいてRussellの記述理論を批判する立場の比較検討を踏まえ、固有名をめぐる議論を指示的用法で用いられた定名詞句に拡張することによって、指示的用法の定名詞句と述語からなる文を単称命題とみなすとされている。またRussellが固有名の使用に必要だとした「見知り」を歴史的説明理論が主張する「間接的見知り」へと修正することによって、指示的用法の定名詞句と述語からなる単称命題に対してより広い汎用性を与えることができることを示している。さらに指示的定名詞句の意味解釈についてより踏み込んだ考察を行ったAlmog (2014) を踏まえ、それを一段階拡張することによって、指示的定名詞句と述語からなる単称命題の意味解釈の機序を具体的に捉えることができることを明らかにした。Almog (2014) の理論の拡張は、本来は単称名辞に関するものである理論を単称命題に応用するために必要な操作であり、また第5章で扱う指示的定名詞句からの外置に関する定性制約の説明への準備ともなっている。この理論の拡張自体は優れた発想だと評価できるが、本論文で採用されなかった拡張方法を採用する可能性も残されているため、今後のさらなる発展が求められる。

第4章と第5章では指示的定名詞句に含まれる制限的関係節についての分析と、その結果を用いての指示的定名詞句からの外置に関する定性制約の考察が行われている。従来から制限的関係節の統語構造については、先行詞をNPとする立場とN’とする立場の対立があった。本論文では指示的定名詞句に含まれる制限的関係節をR関係節と呼び、R関係節が用いられる前提条件を、先行詞のNPを発話するだけでは聞き手が指示対象を同定することができないと話し手が判断することだとしている。そしてこれを踏まえてR関係節はそれを含む指示的定名詞句全体の指示の成立にとって不可欠な一部であるとしている。さらにこれらの考察の論理的帰結として、R関係節の先行詞はNPであると結論づけている。指示的定名詞句に含まれている制限的関係節が定名詞句全体の指示の成立に不可欠な情報を含んでいるという点に関しては妥当だと考えられるが、先行詞がN’でなくNPであるとする結論はいささか性急であり、今後さらなる考察を深める必要がある。

第5章では指示的定名詞句からの外置を一様に文法的に不可とするのではなく、外置を避ける言語処理上の傾向と捉え、外置を避ける理由を指示の確立における聞き手の認知的負荷を増大させないためとしている。外置の可否は第4章で論じた先行詞の範疇問題とも密接に関連しているが、言語学の立場からはStucky (1987) の先行研究に依拠するだけでなく、定名詞句主語からの外置がどの程度聞き手に受容されるのかを調査した経験的なデータもさらに求められるだろう。

第6章では指示の不透明性は定名詞句の属性的用法が原因であるとするCole (1978)

の主張を批判的に検討し、指示的／属性的という区別に加えて聞き手の知識状態が働いているとしているが、第6章は本論文全体の流れから見るとやや異質な感がある。

指示的用法の定名詞句を主語とする単称命題をめぐって、言語哲学の指示理論の批判的検討を通じて定名詞句による指示の様態を明らかにした点は優れた研究と評価できる。ただし、第1章から第3章までの言語哲学を扱った部分では、参考にしている文献が古いため、もう少し新しい文献に基づく考察が必要である。また言語学の立場から求められる経験的データによる裏付けと、第5章と第6章で論点の一つとなっている指示の確立における聞き手の役割については、今後さらに言語学的観点から考察を深める必要があるだろう。しかしながら、全体として本論文は、人間の心的機構の仕組みの解明を通じて言語の構造と機能および他の認知能力との関わりを探求するという共生人間学専攻言語科学講座の趣旨にかなうものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年6月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降